【平成28年度　特別研究】

(1) 感情の身体性に関する心理尺度の開発

社会福祉学科　岡田敦史

1. 研究の背景と目的

鈴木ら(2006)により開発されたモダリティ・デファレンシャル法(MD法)を用いて感情と感覚モダリティとの関連性を調べることを目的とする。同時に,感情の身体関連性についても検討するため「ボディロケーション尺度(BL-S)」と呼ぶ新たな心理尺度を試作した。本研究では,感情カテゴリーとして6つの代表的感情(しあわせ,悲しい,恐い,怒り,驚き,嫌い)を使用した。

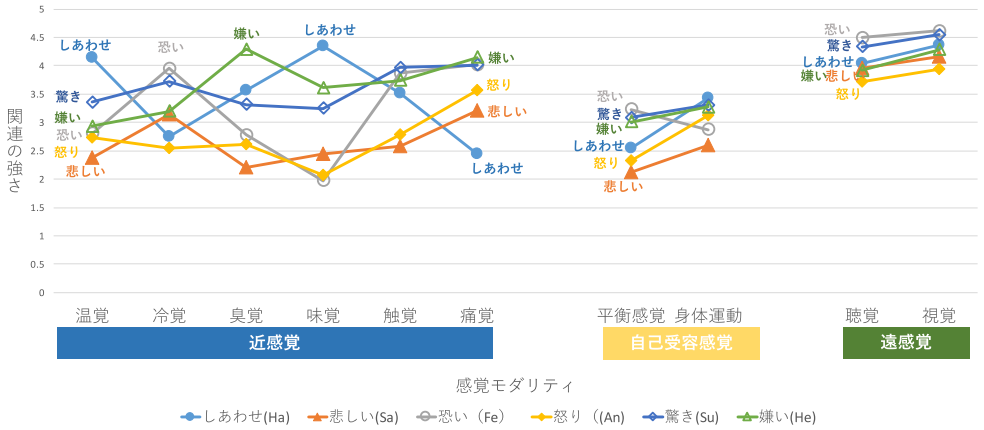
2. 研究の方法

対象とした感情及びMD法とBL-S

6感情についてMD法により評定を求めた。感覚モダリティとしては, 視覚・温覚・嗅覚・平衡感覚・痛覚・聴覚・冷覚・味覚・身体運動・触覚の10種を使用した。加えて,BL-Sでは,身体部位と上記の6感情との関連性について評定を求めた。使用した身体部位としては,額のあたり・喉のあたり・喉と胸の間・胸のあたり・胸と胃の間・胃のあたり・胃とへその間・へそのあたり・へそと下腹部の間・下腹部のあたり・内臓のあたり・上半身・下半身・腕・足・からだ全体の16部位であった。

3. 研究活動内容とその波及効果

1) 感覚モダリティプロフィールから6つの感情ごとの特徴が表われていた。
2) BL-Sプロフィールからは,感情ごとの特色は感覚モダリティほど顕著ではなかった。
3) MDデータでは,「悲しい」と「怒り」が同じクラスターに入り「しあわせ」と最も距離があった。



4. まとめ

今回の分析から,感情と結びつきやすい感覚モダリティが存在することがわかった。また、身体部位との関連性についても感情ごとに特徴的なプロフィールが示された。特に心臓のある胸の部位が従来から「心の座」と言われてきたことがよく理解できた。